

琵琶湖で 24 年間見続けた外来魚の変化

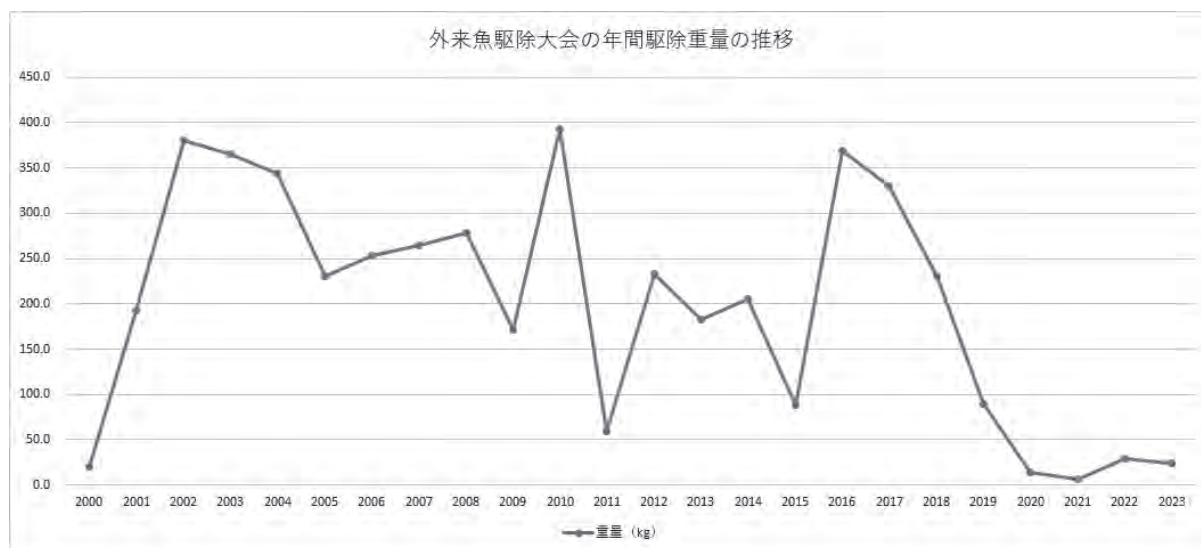
高田 昌彦

(琵琶湖を戻す会)

琵琶湖を戻す会が活動をはじめて、今年で 25 年目を迎える。この間、毎年 4 回のペースで外来魚駆除大会を開催してきたが、途中、悪天候やコロナ禍によるやむを得ない中止はあったものの、開催数は次回の 4 月開催がちょうど 100 回目となる。このうち、毎年 5 月に開催する大会は別会場になるが、それ以外は全て滋賀県草津市の“津田江 1（北）湖岸緑地”（旧志那中湖岸緑地）という同じ場所を会場にしている。この間に参加してくれた参加者のほとんどを、幼稚園から小学校低学年の子供を連れた若い家族が占めている。参加してくれた家族は、数年は参加してくれるものの子供が大きくなると参加しなくなるが、次々と新たな子連れの家族が参加してくれている。

ここで言う“外来魚駆除大会”とは、のべ竿に玉ウキをつけた仕掛けでミミズを餌に使用して外来魚を 1 尾ずつ釣りあげるイベントで、網や仕掛けなどは一切使わない。つまり、この 24 年間に開催した外来魚駆除大会は、同じ場所、同じ方法、同じ漁獲努力量で外来魚をとり続けるという“定点調査”に他ならない。

かつては釣っても釣ってもきりがいいほど外来魚が釣れ続けていたものが、ここ数年はイベントが成立しなくなるほど外来魚は釣れなくなってしまった。その代わりに絶滅危惧種が入れ食いになるという奇跡を目にすることになるとは……。琵琶湖を戻す会の構成員は会社員、教師、自営業者等々で魚類の研究者はいないものの、24 年間“定点調査”をしていると、素人なりにいろいろと見えるものや感じることもある。そこでこの発表では、琵琶湖の外来魚の変化を中心に、24 年間のイベントを通して見えてきたことをお伝えしたいと思う。





2017年4月23日 184.0kg



2023年4月23日 1.6kg